

清水北B遺跡
慶治清水B遺跡

発掘調査報告書

1979

山形県教育委員会

し みず きた
清水北 B 遺跡

けい じ し みず
慶治清水B遺跡

発掘調査報告書

昭和 54 年 3 月

序

本報告書は、県営竹井用水路建設に伴い、昭和 52 年度に山形県教育委員会が調査主体となり、米沢市教育委員会の協力を得て実施した、慶治清水 B・清水北 B 遺跡の発掘調査記録であります。

本調査によって、縄文時代早期・中期・後期の重複した集落跡であることが明らかになり、数多くの上器・石器とともに、縄文時代の中期末の上拡群が検出されました。当地方においては、極めて類例の少ないものであり、本調査の成果が今後の研究の一助となれば幸いです。

最後に、調査に参加された各位はもとより、多大の御協力と御援助を賜った米沢市教育委員会の方々に対し、深甚の謝意を表します。

昭和 54 年 3 月

山形県教育委員会

教育長 吉村敏夫

例　　言

1 本報告書は山形県教育委員が、昭和53年8月23日から10月31日まで延45日間発掘調査を実施したもので、山形県営米沢平野地区竹井用水路工事に係る緊急発掘調査報告書である。

2 発掘調査は、山形県教育委員会が山形県農林部並に関係諸機関と協議のうえ、米沢市教育委員会の協力を得た。ここに関係諸機関の方々に記して感謝を申し上げる。

3 調査体制は下記の通りである。

調査担当 山形県教育庁文化課

調査員 佐藤鎮雄 手塚 孝

4 挿図については遺構のみとし、縮尺は原則として2分の1・3分の1とし、それぞれにスケールを示した。写真図版は遺物について2分の1・3分の1を原則とした。

5 挿図中の記号は、遺構にS・遺構因子にE・遺物にRを冠して、SD一溝・SK一土壙・SP一ピット群・SX一性格不明の遺構・RP一土製品・RQ一石製品とした。

6 本報告書の作成にあたっては、手塚 孝が執筆担当し、佐藤正俊・佐藤義信が補佐した。また本報告書の編集は、佐々木洋治・名和達朗・茨木光裕が担当した。

目 次

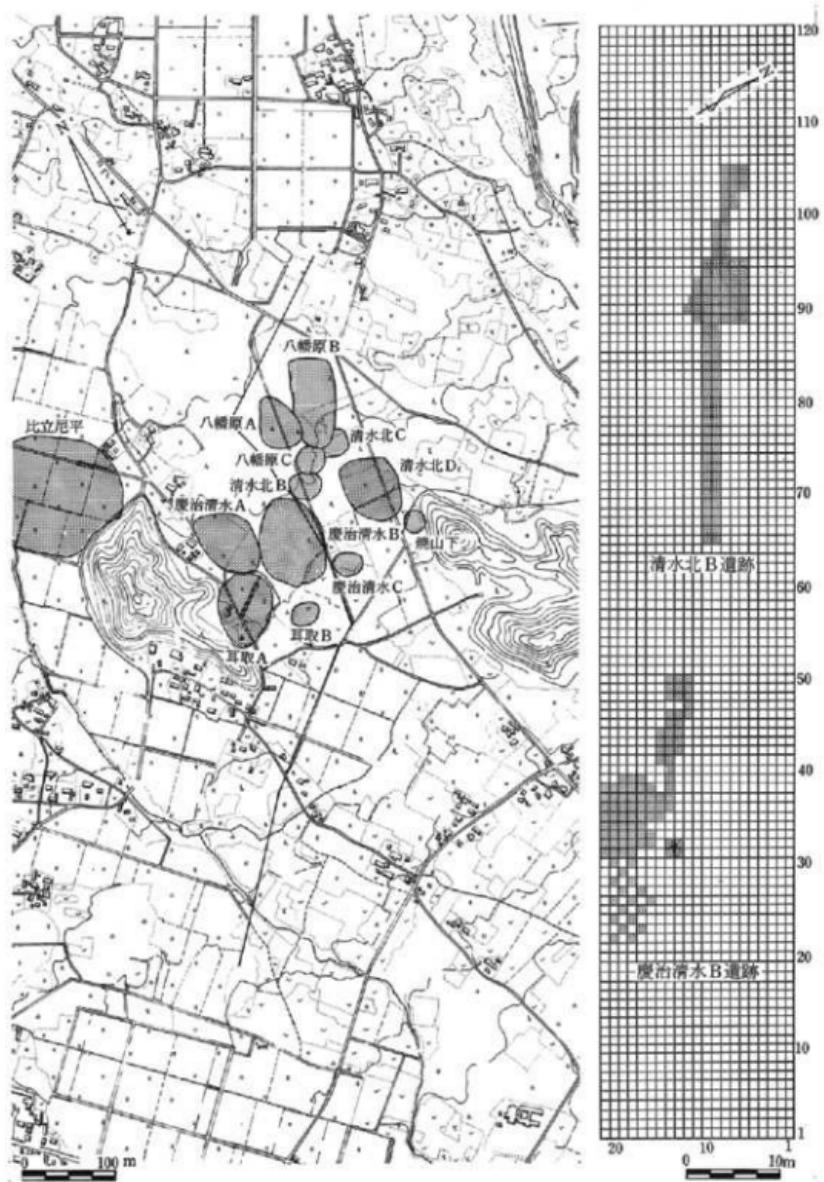
I 調査の経違	1
II 慶治清水B遺跡	
1 遺構	2
2 遺物	6
III 清水北B遺跡	
1 遺構	8
2 遺物	10
3 まとめ	12
付表 1 慶治清水B遺跡 遺跡 遺構計測分類計	7
付表 2 清水北B遺跡 遺構計測分類表	14

挿図目次

第1図 八幡原主要遺跡群 慶治清水B・清水北B遺跡グリッド配置図	
第2図 慶治清水B遺跡 遺構配置図	3
第3図 慶治清水B遺跡 土壌平面図（1）	4
第4図 慶治清水B遺跡 土壌平面図（2）	5
第5図 清水北B遺跡 遺構配置図	9
第6図 清水北B遺跡 土壌平面図（1）	11
第7図 清水北B遺跡 土壌平面図（2）	13

図版目次

- 図版 1 慶治清水B遺跡 発掘状況 第 17・18・20・23 号土壤 完掘状況
第 18 号土壤 土層断面 第 20 号土壤 土壤断面
第 18 号土壤 完掘状況 第 20 号土壤 完掘状況
- 図版 2 慶治清水B遺跡 遺構全景 第 23 号土壤 完掘状況
第 26 号土壤 土層断面 第 34 号土壤 完掘状況
第 26 号土壤 完掘状況 石器出状況
- 図版 3 慶治清水B遺跡 出土土器 慶治清水B遺跡 出土石器（1）
- 図版 4 慶治清水B遺跡 出土石器（2）
- 図版 5 清水北B遺跡 発掘状況 清水北B遺跡 遺構全景
第 30 号土壤 土層断面 清水北B遺跡 遺構全景
第 30 号土壤 完掘状況 第 21 号土壤 土層断面
- 図版 6 清水北B遺跡 出土石器 清水北B遺跡 出土石器（1）
- 図版 7 清水北B遺跡 出土石器（2）



第1図 八幡原主要遺跡群 慶治清水B・清水北B遺跡グリッド配置

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

慶治清水B遺跡・清水北B遺跡は、米沢市の北東部に位置する八幡原工業団地造成地内に存在し、梓川による扇状地に立地する。この付近一帯には、豊かな湧水とともに45ヶ所もの遺跡が群在し、米沢地区唯一の大遺跡群を形成している。

すでに八幡原工業団地造成地内に分布する遺跡群は、米沢市教育委員会の手によって、昭和49年7月から昭和52年度までの2ヶ年半に渡って発掘調査が実施されている。この中で、慶治清水B・清水北B遺跡ら4ヶ所の遺跡は、工業団地縁地帯に加わることから、発掘調査区から除外されていたが、新たに県営米沢平野地区竹井用水路の工事が行なわれることが判明した。

山形県教育委員会は県農林部との協議により、昭和52年9月6日～同8日と同年11月5日6日計5日に渡って分布調査を実施した結果、慶治清水B・清水北B遺跡の二ヶ所の遺跡が水路線敷に加わることが判明、記録保存を前提とする発掘調査を行なうこととした。

発掘調査は、米沢市教育委員会の協力を得て、山形県教育委員会が行ない、昭和52年8月から実施した。

2 調査経過

調査期間 自昭和52年8月23日～同年10月31日、のべ45日間

調査担当 山形県教育庁文化課（佐藤鎮雄・手塚孝）

8月23日より着手。機材の搬入、テント設営を進める一方、工事関係者の立ち合いで水路センター基準杭の確認および木の伐採に関する協議を行う。

調査は2×2mのグリッド法を用い、水路センター杭No61～No68を基準線として、遺跡の範囲に加わる東西21m、南北120mを設定した。伐採が当初より大幅に遅れたこともあり原野、畠部分を占める慶治清水B遺跡より開始する。

ちなみに慶治清水B遺跡は、8月24日～9月14日、10月25～10月31日計24日を要し、清水北B遺跡は、伐採終了後を待って、9月16日～10月25日のべ21日に渡って調査を行なった。遺構は、慶治清水B遺跡の14～21～32～39と清水北B遺跡の7～12～89～95に集中的に検出され、前者の慶治清水B遺跡は縄文中期末の土壙群を主に後者の清水北B遺跡は縄文後期初頭、縄文早期の土壙、ピット群が確認された。

遺跡の精査面積は慶治清水B遺跡が416m²、清水北B遺跡が446m²計862m²である。

II 慶治清水B遺跡

1 遺構

本遺跡より検出された遺構は、土壙、ピット群合せて39基で、この中のピット群に関しては遺構の分布状況よりAピット群、Bピット群と便宜上大別した。

今回の報告は、紙数他の都合上、全遺構の記載は難しいので、代表的な遺構を簡単に述べることにして、他は第1表、慶治清水B遺跡遺構計測分類表を参照願いたい。

土壙 (第3~4図 図版1・2)

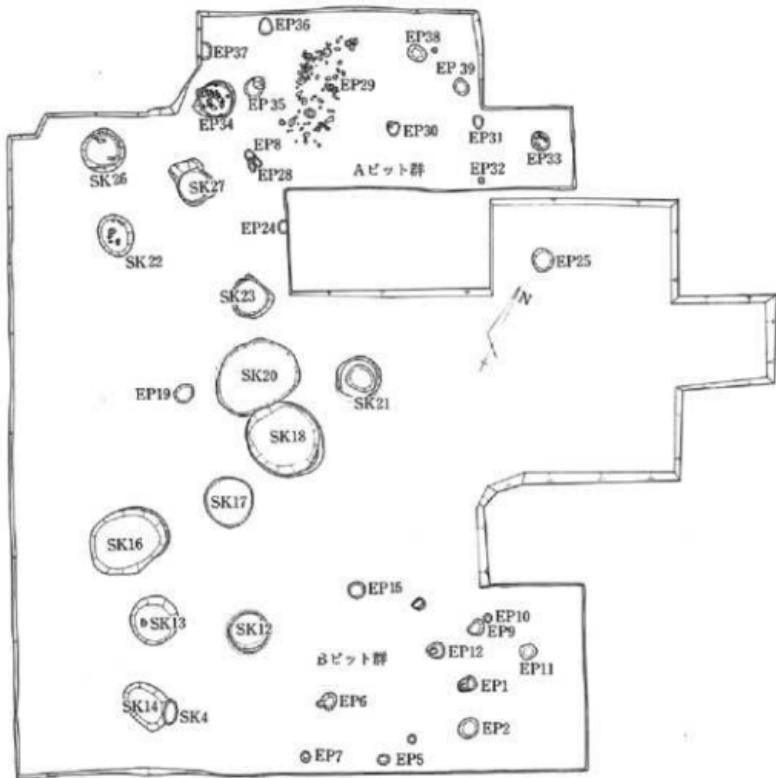
傾斜直上部に分布するのが特徴で、18~21~32~39区を中心に12基検出されている。平面形状は、楕円形および円形プランを呈し、上端の一部が崩れて不規則な形状を示すSK24や23の他、一部が後世の遺構によって切られた(現実的には破壊された)SK14やSK27も存在するが、基本的には円形を示すものとみられる。内部形状は、明瞭に残るSK18、SK20、SK12よりみて、平面より底面に広面をもつ袋形の形態が基本的プランとみられる。覆土は黒褐色ないし暗褐色を有するものが多くすべて自然堆積状況を示すことが注意される。土壙の大きさは長径180cm、短径150cmを計るSK20を最大として、長径160cm×短径150cmのSK18と長径70cm×短径140cmのSK16の3基が最も大きい仲間に加わり、深さは、SK20が32.5cm・SK18が46cm・SK16が28cmと非較的深い特徴を示す。一方SK12他8基は平均長径97cm・短径85cm・最も深いSK17を除く他は平均32cmと平面計測と比較して深い特徴をもつ。遺物は土壙内からは検出されなかった。

ピット群 (第2図)

すでに前述した様に本遺跡から検出された27基のピット群は、分布状況よりA・Bの二つのグループに分けられることを指摘した。Aのグループは、16~19~37~39の範囲を中心に16基存在し、Bのグループは16~18~32~33を中心に11基在り、何れも土壙の真上部に位置する。Aピット群は不規則な円形状に、Bピット群は楕円形状に分布するのが、特に意図的な配置はない。また大きさも20~50cmの範囲に加わり、深さも最深45cm、最浅で5cmと柱穴的要素を示すものもあるが、住居跡とは区別する他の施設とみられる。

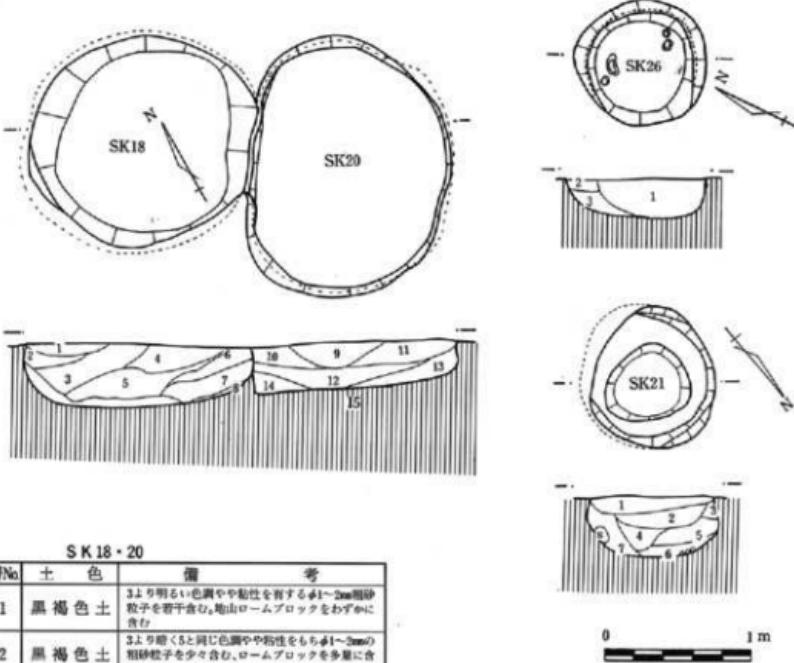
その他の遺構 (第2図)

その他の遺構としては、EP29付近の集石があるが、遺構としての有無は難しい。



0 2m

第2図 慶治清水B遺跡 造構配置図



SK 18・20

層No	土 色	備 考
1	黒褐色土	3より明るい色調やや粘性を有する $\phi 1\sim 2$ mm粗砂粒子を若干含む。地山ロームブロックをわずかに含む。
2	黒褐色土	3より暗く3と同じ色調やや粘性をもつ $\phi 1\sim 2$ mm粗砂粒子を少々含む。ロームブロックを多量に含む。
3	黒褐色土	4より暗く5より明るい色調、粘性を有し $\phi 1\sim 2$ mm粗砂粒子を若干含む。ロームブロック粒子をやや多量に含む。
4	黒褐色土	5より暗い色調でもっとも暗く風味がある。やや粘性を有し $\phi 1\sim 2$ mm粗砂粒子を若干含み、ロームブロック粒子を多量に含む。
5	黒褐色土	4よりやや明るい色調やや粘り、少々しまって暗い $\phi 1\sim 2$ mm粗砂粒子を多量に含む。ロームブロック粒子を少々含む。
6	暗褐色土	4よりやや明るい色調やや粘り、少々しまって暗い $\phi 1\sim 2$ mm粗砂粒子を多量に含む。ロームブロック粒子を少々含む。
7	暗褐色土	6よりやや暗くより明るい色調、やや粘性をもつよりしまって暗い $\phi 1\sim 2$ mm粗砂粒子をやや多量に含む。ロームブロック粒子を若干含む。
8	暗灰褐色土	よりしまって暗い粘土質で高めの土でロームブロック粒子。ロームブロック粒子を少々含む。
9	暗茶褐色土	ややしまって暗め $\phi 1\sim 2$ mmの粗砂粒子を少々含む。ロームブロック粒子を少々含む。
10	暗茶褐色土	10と同じであるがわずかに黄褐色ローム粒子がわずかに入る。
11	暗茶褐色土	粘性を有ししまっている $\phi 1\sim 2$ mmの粗砂粒子がわずかに入る。黄褐色ロームブロック粒子を少々含む。
12	暗褐色土	粘性を有ししまっている $\phi 1\sim 2$ mmの粗砂粒子がわずかに入る。黄褐色ロームブロック粒子を少々含む。
13	暗褐色土	13と同じである。
14	暗褐色土	13と同じである。
15	黄赤褐色 砂質シルト	上面が強化したように赤褐色で小粒を少量含む

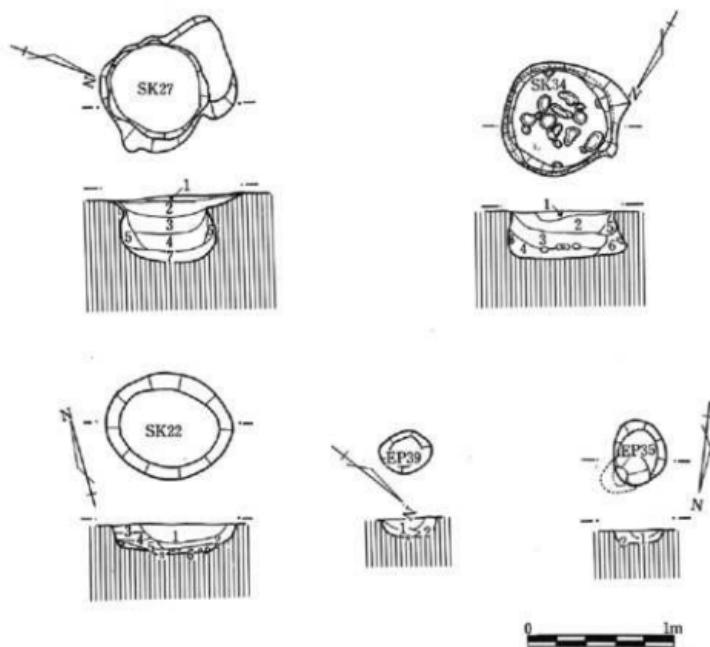
SK 21

層No	土 色	備 考
1	暗褐色土	3より暗く2より明るい色調、ややバサバサ $\phi 1$ mmの微細粒子を含む。粘土ブロックを含む。
2	黒褐色土	3より明るい色調やや粘質のシルト質 $\phi 1\sim 2$ mmの微細粒子を含む。 $\phi 10$ mm程度の小礫を若干含む。
3	暗褐色土	3と同じ色調粘性に富み、ロームブロック粒子を多量に含む。
4	黒褐色土	やや粘性に富み、炭化粒子をやや多量に含む。
5	黒褐色土	4より明るい、やや粘性的微細質で $\phi 1\sim 2$ mmの小砂粒を含む。 $\phi 1$ mmの微細粒子を若干含む。
6	暗褐色土	わざわざに粘性をもつ微細質で $\phi 1\sim 2$ mmの粗砂粒子を若干含む。ローム粒子をやや多量に含み底面に礫($5\sim 10$ cm)が少しかれている。
7	暗褐色土	6より暗い。ややさらさらさのある微細質で $\phi 1\sim 2$ mmの粗砂粒子(粗砂)を多量に含む。ロームブロック粒子をやや多量に含む。
8	黄褐色シルト質粘土	(地山)

SK 26

層No	土 色	備 考
1	黒色土	微砂質粘性に富む。砂粒若干含む。柔かい炭化粒子若干含む。
2	暗褐色土	微砂質で固くしまっている。やや粘性を有する小砂粒を含む(粗砂)。
3	暗褐色土	微砂質で固くしまっている。ややサラサラする感を少量含む。

第3図 慶治清水B遺跡 土壌平面図(1)



SK22

層No	土 色	備 考
1	黒褐色土	粘性を有し、しまっている。微砂質・砂粒子若干含む
2	黒色土	粘性を有ししまっている粘質土・炭化粘土若干含む
3	暗褐色土	やや粘性を有ししまっている微砂質で若干小粒含む
4	暗褐色土	③より明るい色調やや粘性で、薄褐色粘土を若干含む
5	暗褐色土	③より明るく④より暗い色調、やや粘質
6	暗褐色土	やや粘性を有する、微砂質・隕石含む

SK34

層No	土 色	備 考
1	黒褐色土	微砂質で粘性に富む。砂粒子若干含む
2	黒色土	粘子・藻み、白色微砂粒子を若干含む、炭化粘子若干含む
3	黒褐色土	①より黒褐色が濃い、微砂質で粘性に富みしまつていて、ガラス質白い砂粒子少含む
4	黒褐色土	③より明るい、微砂質で粘性を富んでいて、砂粒子より砂粒を多量に含む
5	暗褐色土	砂粒質やや粘性を有ししまっているガラス質(石英)微砂粒子を多量含む
6	暗褐色土	④より明るい、微砂質で粘性を有し、しまっている

EP39

層No	土 色	備 考
1	暗褐色土	微砂質でややさらさらする。炭化粘土若干含む。410mmの小隙少量含む
2	暗褐色土	1より明るい、微砂質でやや粘性を有する、白色微砂粒子を少量含む

EP35

層No	土 色	備 考
1	暗褐色土	微砂質、やや粘性を有ししまっている炭化粘土わずかに認む
2	暗黃褐色土	粘性に富み固くしまっている

層No	土 色	備 考
1	黒褐色土	3と同じ
2	暗褐色土	微砂質で粘性に富み、しまっている。黄褐色砂質シルトアコラク若干含む、炭化粘子若干含む
3	暗褐色土	より明るい色調で微砂質でやや粘性をもつ炭化粘子若干含む
4	暗褐色土	より明るい色調で微砂質でやや粘性をもつ炭化粘子若干含む
5	暗褐色土	3と同じ
6	暗黃褐色土	砂質で410mmの小隙を若干含む、やや粘性を有し11.5mm以下の細砂層とみられる
7	黃褐色砂	塊出。固くなればシルト質である

第4図 慶治清水B遺跡 土壌平面図(2)

2 遺 物

本遺跡から出土した遺物は、土器・石器合せて整理箱3箱と数少なく、中でも主体を示すのが石器で、全体の5分の4を占める。遺物は遺構出土のものは、ほとんどなく、第II層および第III層出土が主である。

a 石 器 (図版3・4)

石器は、石鏃2点・石錐1点・打製石斧の基部が欠損したもの1点、撃器6点、片縁のみを加工する削器5点、両縁に主要剝離を施すもの2点と凹石4点、磨石3点、石皿の欠損品2点とそれに加工の加えられないフレーク・チップが含む。石材は前者の石鏃、石錐、他は、硬質頁岩を用い、後者の凹石、磨石類は安山岩および凝灰岩を主とする。

b 土 器 (図版3)

土壤付近を中心に40点ほど出土している。赤奈褐色ないし明褐色を示すものが多く、磨滅が激しく、焼性は悪い。胎土は、多量の石英微砂と砂粒を含む。

文様は器面が崩れて不明瞭なものがほとんどであるが、一部L R・R L等による斜纏に、横走する要素を示す沈線があることから、縄文時代中期末葉に位置するものとみられる。

3 まとめ

今回検出された遺構は、土壤12基を含むA・B二つのビット群が認められている。特にこの中で注目すべき点は、土壤の分布にある。すでに筆者は八幡原No24遺跡の報告でも触れている様に、八幡原遺跡群の中核となる遺跡群は中央に位置する湿地帯に沿ってU字状の微高地が張り出し、遺跡はその微高地直上に分布する特質を指摘した。

しかも縄文中期後葉期に関しては、微高地の傾斜変換線直下もしくは直上に特定の遺構が存在することで、No24遺跡は殆ど円形に配置された17基の土壤群それに25m離れた部分に縦穴住居跡1棟も発見されている。一方、No26遺跡(2)でも傾斜面に沿って、A・B二つの土壤群が検出され、幾れも一線上に配するのが特徴で、A土壤群の直上にビット群が存在するのもあり、本遺跡と大変類似することを注目したい。しかも、これら一連の土壤群は形状が基本的に円形を呈し、内部形態も主体的に袋状土壤が占めることも注意される。

さらに土壤内に堆積する埋土もすべて自然堆積状況を示すことや、遺物をまったく含まないことも考慮し、土壤の機能を考える課題としたい。

① 手塚孝 (1976) 「No24(清水北C)遺跡」『米沢市八幡原中核工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書』第2集 米沢市教育委員会

② 手塚孝 (1977) 「No25(八幡原A)遺跡」『米沢市八幡原中核工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書』第3集 米沢市教育委員会

表1 慶治清水B遺跡遺構計測分類表

遺構名	No	地区名	長径・短径(cm)	面積(cm ²)	形 状	底面及壁の状態	備 考
EP	1	17-32	長 短 幅 幅	25 25	12 円 形	平坦で立ち上り垂直	
EP	2	17-32	長 短 幅 幅	50 40	33 円 形	平坦で立ち上り斜	
EP	3	17-32	長 短 幅 幅	40 30	33.5 横 円 形	不整で立ち上り垂直	
EP	4	20-32	長 短 幅 幅	11.0 9.0	17 不整横円形	平坦の皿状	
EP	5	18-32	長 短 幅 幅	30 20	12 円 形	平坦で立ち上り斜	
EP	6	18-32	長 短 幅 幅	40 30	3 不整横円形	平坦で立ち上り斜	
EP	7	18・19-32	長 短 幅 幅	30 20	13.5 円 形	平坦で立ち上り斜	
EP	8	19-38	長 短 幅 幅	40 30	11.5 横 円 形	平坦で立ち上り垂直	
EP	9	17-33	長 短 幅 幅	25 20	4 円 形	平坦の袋状	
EP	10	17-33	長 短 幅 幅	40 30	26.5 横 円 形	平坦で立ち上り垂直	
EP	11	16-33	長 短 幅 幅	30 20	16.5 横 円 形	不整で立ち上り斜	
SK	12	17-33	長 短 幅 幅	100 90	50.5 円 形	平坦の袋状	
SK	13	20-33	長 短 幅 幅	110 100	27 円 形	平坦で立ち上り垂直	
EP	14	20-32	長 短 幅 幅	40 30	30 不整横円形	平坦の皿状	
EP	15	18-33	長 短 幅 幅	40 20	6 不整横円形	平坦で立ち上り垂直	
SK	16	20・21-34	長 短 幅 幅	170 140	28 横 円 形	平坦の皿状	
SK	17	19-34・35	長 短 幅 幅	110 100	5 円 形	平坦の袋状	
SK	18	18~19-35	長 短 幅 幅	160 150	46 円 形	平坦の袋状	SK20を切る
EP	19	20-35・36	長 短 幅 幅	40 35	10.8 横 円 形	平坦で立ち上り垂直	
SK	20	19-35・36	長 短 幅 幅	180 150	32.5 横 円 形	平坦の袋状	SK18に切られる
SK	21	18-35・36	長 短 幅 幅	100 90	37.5 円 形	不整の袋状	
SK	22	20・21-37	長 短 幅 幅	80 75	13.5 円 形	平坦の皿状	
SK	23	19-36・37	長 短 幅 幅	90 75	36.3 不整横円形	平坦の袋状	
EP	24	19-37	長 短 幅 幅	20 15	4 横 円 形	平坦で立ち上り垂直	
EP	25	16-37	長 短 幅 幅	50 40	10 円 形	平坦で立ち上り斜	
SK	26	20・21-38	長 短 幅 幅	100 90	25 円 形	平坦の袋状	
SK	27	19・20-37・38	長 短 幅 幅	100 80	40 不整横円形	平坦の袋状	
EP	28	19-38	長 短 幅 幅	50 30	9 不整横円形	不整で立ち上り斜	
EP	29	18-38	長 短 幅 幅	30 20	11.5 横 円 形	平坦で立ち上り斜	
EP	30	17・18-38	長 短 幅 幅	30 20	2.5 横 円 形	不整で立ち上り垂直	
EP	31	17-38	長 短 幅 幅	30 20	3.5 横 円 形	平坦で立ち上り垂直	
EP	32	17-38	長 短 幅 幅	20 15	15 横 円 形	平坦で立ち上り垂直	
EP	33	16-38	長 短 幅 幅	40 30	26 横 円 形	不整の皿状	
SK	34	19・20-38・39	長 短 幅 幅	90 80	27 不整横円形	不整の袋状	
EP	35	19-39	長 短 幅 幅	50 40	42.5 横 円 形	不整で立ち上り斜	
EP	36	19-39	長 短 幅 幅	40 20	8.5 方 形	平坦で立ち上り斜	
EP	37	19-39	長 短 幅 幅	30 20	5 横 円 形	平坦で立ち上り斜	
EP	38	17-39	長 短 幅 幅	40 35	20 横 円 形	平坦で立ち上り斜	
EP	39	17-39	長 短 幅 幅	40 30	19 円 形	平坦で立ち上り斜	

III 清水北B遺跡

1 遺構

7~12-89~95 拡張部を中心に 31 基の遺構が検出され、第III層と第IVに渡って遺構が認められ、特に第IV面からは、7 基の土坑と 6 基のビットそれに 5~10 cm 位の小ビット群が全域に 66 箇所検出され、幾れも深さが 5~15 cm の浅い堀り込みをもつ。前者のIII層は縄文中期末から後期初頭、後者のIV層検出遺構を縄文早期遺構と出土遺物より、判断することができた。今回はこれらの遺構を層位別に簡単に付記することにして、詳しい遺構の計測および層位は第 2 表。清水北 B 遺跡遺構計測表を参照願いたい。

a 第III層遺構 (第 5 図)

土壙 7 基、ビット 10 基の計 17 基の遺構が存在する。この中で SK 30 のみが前項の慶治清水 B 遺跡と同様の袋状土壙形態を呈し、埋土中より縄文中期後葉の土器片も得ていることから、縄文中期末に位置するものとみられる。

土壙 (第 5 ~ 7 図)

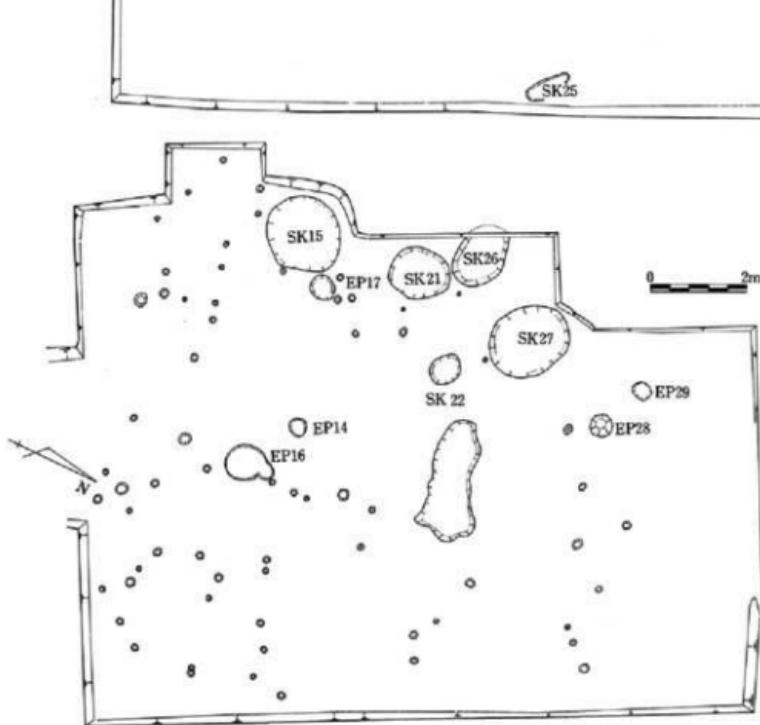
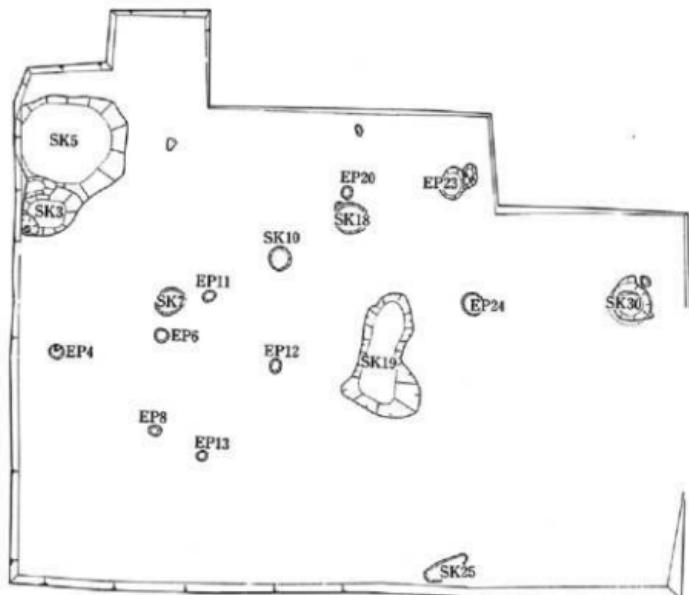
SK 19 を除く他は、平面形状がほぼ円形を呈し、SK 30 は上端が一部崩れているものの上面で長径 100 cm、短径 90 cm の袋状を有して、両壁に 15~20 cm ほど入り込み 135 cm を計る。深さは最深で 53 cm を測し、埋土は暗褐色を主に 10 枚に分かれる。SK 5 は SK 3 を切って構築しており、長径 280 cm、短径 240 cm と本遺跡の最大規模をもつ。底面は平坦で埋土は 4 枚である。SK 3 は長径 130 cm、短径 100 cm を計り、埋土は褐色シルトを主に 7 枚である。他に SK 18・SK 10・SK 7・SK 25 の小規模土壙がある。この中で SK 19 を除くほとんどの遺構より少量の土器片が検出され、SK 30 は縄文中期末(大木 10 式) SK 18・SK 10、SK 7 からは縄文後期初頭の遺物が得られている。

ただし、これらの土壙群はすべて埋土が自然堆積に分類できることから、時期決定は難しく十分考慮する必要がある。

ビット (第 5 図)

10 基存在する。この中で EP 23 と 24 は形態より、小規模土壙の範囲に加えた方が妥当とも思われるが、遺物が含まないことと、埋土の状況も考慮してビットの仲間に加えた。

上記の二基のビットを外して述べると、長径が 20~35 cm・深さが 12~18 cm と一定し、覆土も黒褐色ないし暗褐色を示し、不規則ながらも柱を用いた施設の可能性をもつ。



第5図 清水北B遺跡 造構配置図

b 第IV層遺構 (第5図)

第IV層からは土壌、ピットそれに小ピット群の合せて76基もの遺構が7~12~89~95拡張を中心に認められ、少し離れて9~104区よりピット1基と、9~65区、9~10~65~66区より2基の土壌群が検出、確認されている。

土 壤 (第5~7図 図版5)

底面がゆるい皿状を示し、浅い堀り込みを呈するのが特徴で、6~9cmの範囲におさまる。平面形状も、ゆるやかな橢円形状をもち、大きさもSK15が長径160×短径150cmと最も大で、SK1の長径140×短径120cm、同長のSK27が次ぎ、SK21・SK26が長径130×100cm、SK22が長径70×60cmの最小である。覆土は、明褐色ないし、褐色微砂を主として、少量の早期前半の土器を含む。

ピット

円形プランを呈し、40~90cmの径をもち埋土に土器片を有するものと、5~25cm位で深さが8~15cm位の二者がある。前者のピット群は土坑内近に隣接し、後者のピット群は、全域に点在するのが特徴とする。

2 遺 物

本遺跡出土の遺物としては、土器整理箱1箱、石器整理箱の計1箱で、土器、石器がほぼ等しく含む。土器のほとんどは土壌および、ピット内出土が主で、この中に石器半数が遺構内出土である。

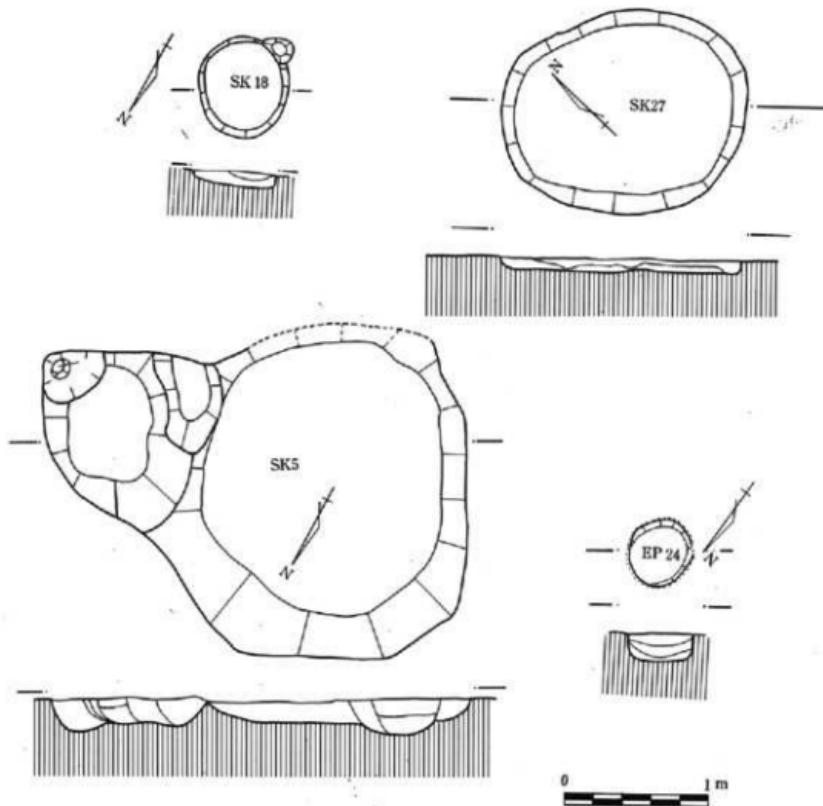
a 石 器 (図版6・7)

石器としては、二等辺三角形を有し、基部が「へ」字状のえぐりを示す石鎌2点と尖頭器3点とスクレバー類が多く、この中には円形搔器2点と同器の一部を打ち削いた様な形状を示す搔器類それに剥片の片縁に加工を有した削器類9点を含み、石材は硬質な頁岩を用いてある。その他に安山岩、凝灰岩を用いた凹石3点、磨石6点、石皿破片3点がある。

b 土 器 (図版6)

時期的に3群に分けることができる。

A群土器一縄文中期末に属するもので、LR・RL斜縄文に沈線の区画を呈し、それに磨消手法を加えたものがある。大木10式に併行するものとみられる。16点出土している。



SK 18

層No	土色	備考
1	暗黒褐色土	泥炭質で粘りを有する
2	暗黒色微砂質土	地山と1層の混合質?

EP 24

層No	土色	備考
1	茶褐色土	—
2	黒褐色土	暗褐色シルトを階段状に含む
2	暗黒褐色粘質土	暗褐色一黃褐色シルトを階段状に含む

SK 27

層No	土色	備考
1	暗褐色土	シルト質
2	明褐色土シルト	遺物を含む
3	地山	

SK 5

層No	土色	備考
1	暗褐色シルト	後世掘りこみ
2	明褐色シルト	後世掘りこみ
3	褐色シルト	後世掘りこみ
4	暗黄褐色シルト	

第6図 清水北B遺跡 土壌平面図(1)

B群土器—すべて口縁部破片であり、有孔突起をもつものや、「の」字状の貼り付文に棒状の刺突と「の」字状の沈線でおさえ付けたもの。縄文後期初頭の掘之内II式に併行するものとみられる。15点出土している。

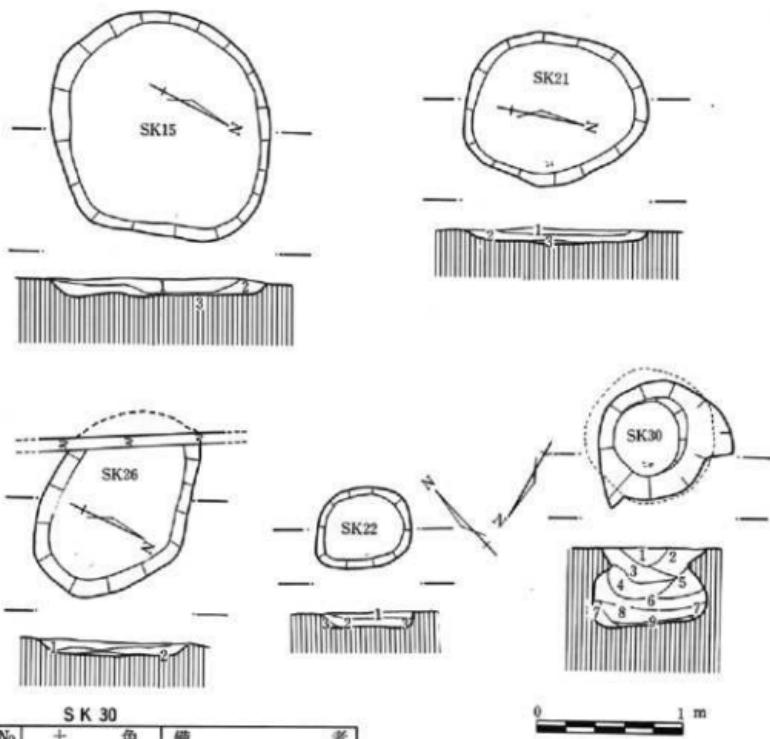
C群土器—暗褐色を呈し、小量の石英砂を含み焼性は良い。文様は口縁部の両縁に一部貝殻文をのぞかせるのみで体部は焦文で統一する。すべて破片なので器形は明確にできないが、口縁がやや外反気味の尖底土器である。縄文早期前半の大寺式に併行するものとみられる。300点位出土している。

3　まとめ

清水北B遺跡での縄文早期前半の遺構の検出は、予想していなかった発見であり、すでに昭和50年度の調査において、米沢初の早期前半の住居跡1棟がNo24遺跡より検出されていることが、新めて重要な意味をもつものと言える。また早期外の中期、後期の遺構に関しても同様で、慶治清水B(No16)遺跡、No24遺跡さらには八幡原遺跡群全体を把握する上で、重要な手掛を得たことは言うまでもない。

① 手塚 孝 (1976)「No24(清水北C)遺跡」『米沢市八幡原中核工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書』

第2集 米沢市教育委員会



SK 30

層No	土色	備	考
1	暗褐色土		
2	暗褐色微砂質土		
3	暗茶褐色土		
4	暗茶褐色土	黄褐色シルトを雷駆状に含む	
5	暗褐色土	黄褐色シルトを雷駆状に含む	
6	茶褐色微砂質土	黄褐色シルトをまだら状に含む	
7	明褐色微砂質土	黄褐色シルトと茶褐色土の混合層	
8	灰褐色シルト	黄褐色シルトに異褐色 さが含まれ灰色と化して いる	
9	黄灰褐色シルト		

0 1 m

SK 21

層No	土色	備	考
1	暗褐色シルト		
2	褐色シルト	水質で粘りを有する	
3	地山		

SK 26

層No	土色	備	考
1	暗褐色土	シルト質微砂層	
2	褐色シルト		
3	地山		

SK 22

層No	土色	備	考
1	暗褐色シルト	水質で粘りを有する	
2	明褐色シルト	水質で粘りを有する	
3	黄褐色シルト	水質で粘りを有する	
4	地山		

SK 15

層No	土色	備	考
1	褐色シルト		
2	明褐色シルト		
3	地山		

第7図 清水北B遺跡 土壌平面図(2)

表2 清水北B遺跡遺構計測分類表

遺構名	No	地区名	長径・短径(cm)	深さ(cm)	形・状	底面及壁の状態	備考
SK	1	9-65	長 短 径 径	140 120	7	楕円形	平坦の皿状
SK	2	10~65-66	長 短 径 径	140 109	9	楕円形	平坦の皿状
SK	3	10・11-89	長 短 径 径	130 100	21	不整椭円形	平坦の皿状
EP	4	9-89	長 短 径 径	35 30	18	円形	不整で立ち上り垂直
SK	5	11・12-89~91	長 短 径 径	280 240	16	不整椭円形	平坦の皿状
EP	6	9-90	長 短 径 径	30 25	11	円形	平坦で立ち上り垂直
SK	7	9・10-90	長 短 径 径	65 60	13	楕円形	平坦で立ち上り垂直
EP	8	8-90	長 短 径 径	30 20	12	円形	平坦で立ち上り斜
SK	9	9・10-90	長 短 径 径	22 20	10	円形	平坦で立ち上り斜
SK	10	10-91	長 短 径 径	50 45	11	円形	平坦の皿状
EP	11	10-90・91	長 短 径 径	30 29	18.5	楕円形	平坦で立ち上り斜
EP	12	9-91	長 短 径 径	30 20	17	楕円形	平坦で立ち上り斜
EP	13	8-90・91	長 短 径 径	25 29	12	円形	平坦で立ち上り垂直
EP	14	9・10-91	長 短 径 径	40 30	16	円形	平坦の皿状
SK	15	11・12-91	長 短 径 径	160 150	7.5	円形	平坦の皿状
EP	16	9・10-90・91	長 短 径 径	90 80	20	不整椭円形	平坦で立ち上り斜
EP	17	11-91	長 短 径 径	55 50	6.5	円形	平坦の皿状
SK	18	10・11-92	長 短 径 径	70 60	6	円形	平坦の皿状
SK	19	8~10-92・93	長 短 径 径	260 160	37	不整椭円形	平坦の皿状
EP	20	11-92	長 短 径 径	30 29	9	楕円形	平坦で立ち上り斜
SK	21	11-92	長 短 径 径	130 110	7	楕円形	平坦の皿状
SK	22	10-92	長 短 径 径	70 60	9	楕円形	平坦の皿状
EP	23	11-93	長 短 径 径	80 70	12.5	不整椭円形	平坦の皿状
EP	24	9・10-93	長 短 径 径	50 40	19	円形	平坦の袋状
SK	25	7-93	長 短 径 径	70 40	14	楕円形	平坦の皿状
SK	26	11・12-92・93	長 短 径 径	130 100	6	楕円形	平坦の皿状
SK	27	10・11-93~94	長 短 径 径	140 120	6	楕円形	平坦の皿状
EP	28	9・10-94	長 短 径 径	50 45	23	円形	平坦で立ち上り斜
EP	29	10-94	長 短 径 径	45 40	5.5	円形	平坦で立ち上り斜
SK	30	9・10-95	長 短 径 径	160 90	53	不整椭円形	平坦の袋状
EP	31	9-104	長 短 径 径	50 45	23	円形	平坦で立ち上り斜

図 版



彦治清水 B 遺跡 発掘状況



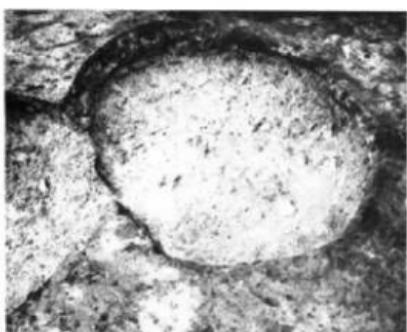
第 17・18・20・23 号土壤 完掘状況



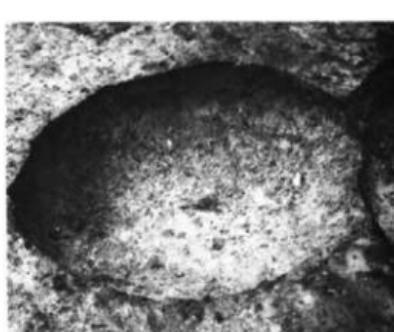
第 18 号土壤 土層断面



第 20 号土壤 土層断面



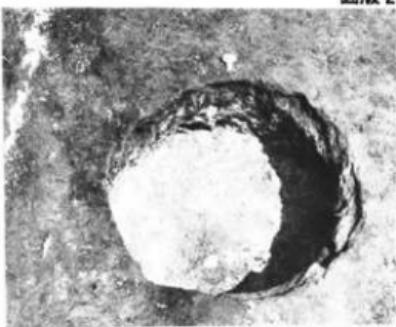
第 18 号土壤 完掘状況



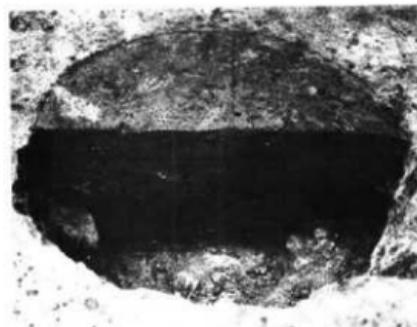
第 20 号土壤 完掘状況



生治清水 B 遺跡 遺構全景



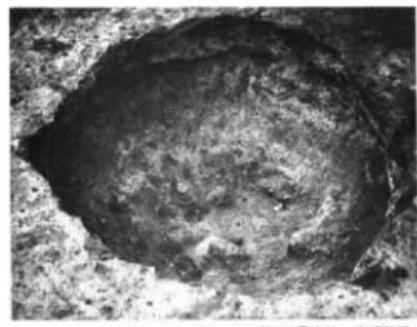
第 23 号土壤 完掘状况



第 26 号土壤 土层断面



第 34 号土壤 完掘状况



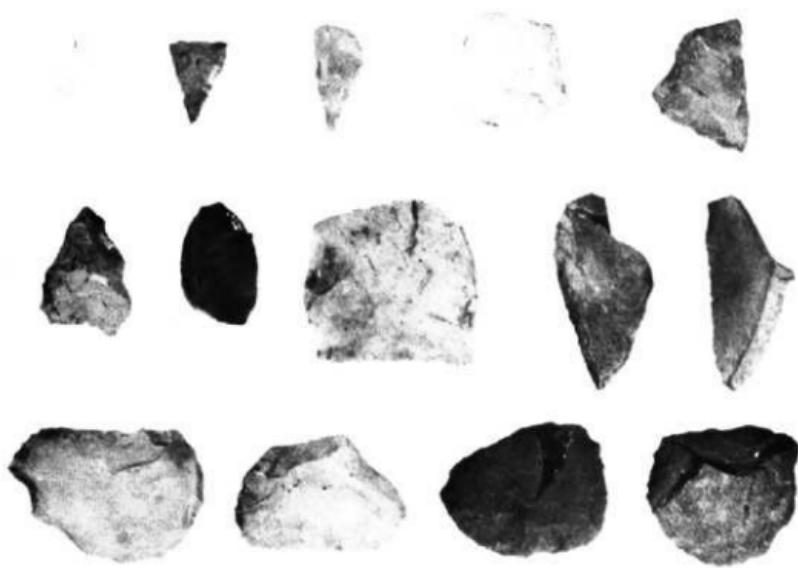
第 26 号土壤 完掘状况



石器出土状况



慶治清水B遺跡 出土土器



慶治清水B遺跡 出土石器(1)



慶治清水B遺跡 出土石器（2）



清水北 B 遺跡 発掘状況



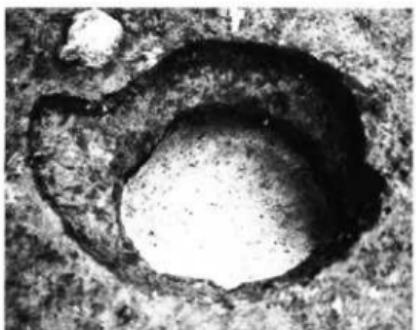
清水北 B 遺跡 遺構全景



第 30 号土壤 土層断面



清水北 B 遺跡 遺構全景



第 30 号土壤 完坯状況



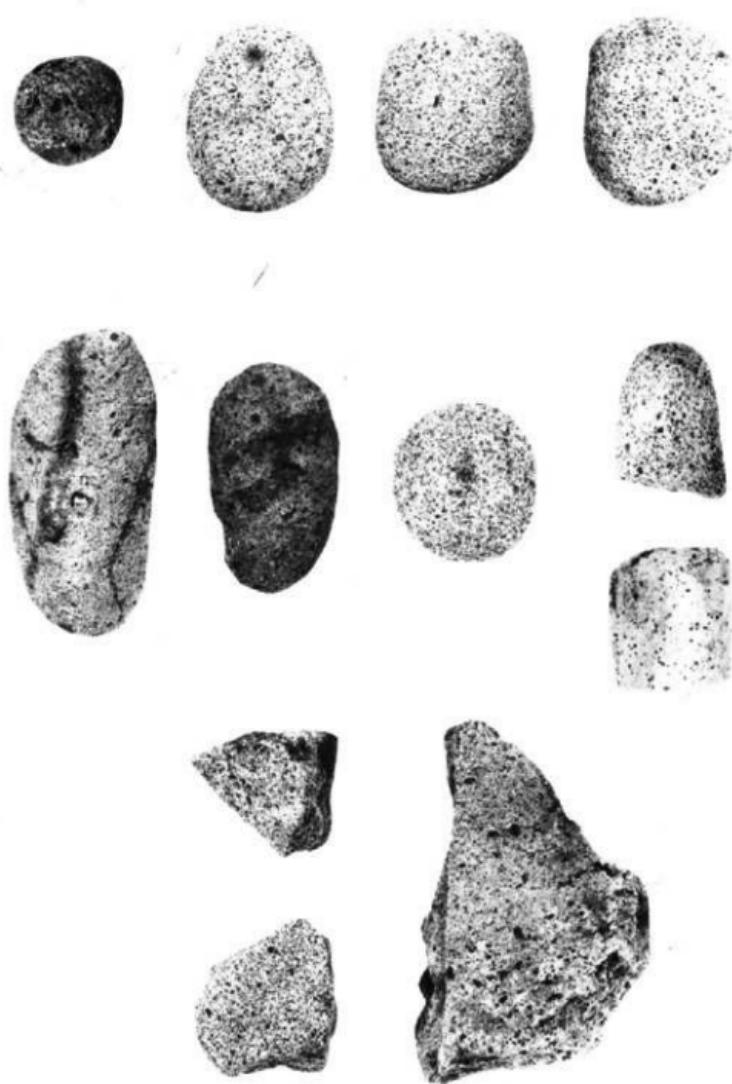
第 21 号土壤 土層断面



清水北 B 遗迹 出土土器



清水北 B 遗迹 出土石器 (1)



清水北B遺跡 出土石器（2）

山形県埋蔵文化財調査報告書第24集

しみずきたけいじしみず
清水北B・慶治清水B遺跡

発掘調査報告書

昭和54年3月28日 印刷

昭和54年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 株式会社 大風印刷

山形市あこや町1-4-3 TEL31-55750
